

クジラとツグミ ～伝統的食文化を考える～

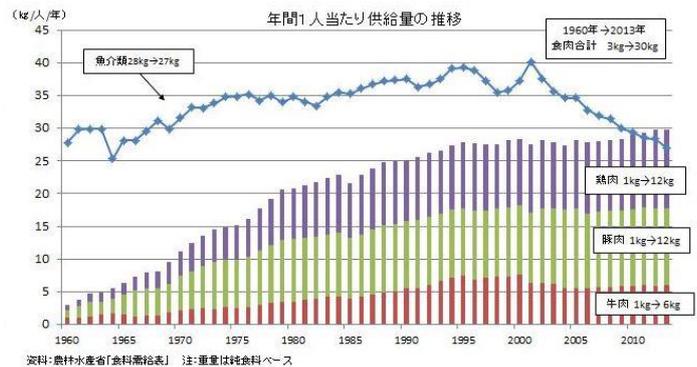
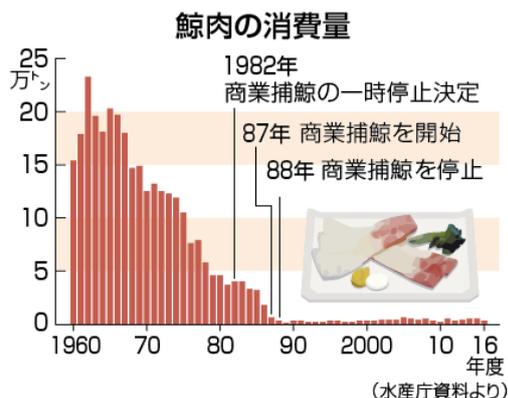
1. はじめに

「日本、国際捕鯨委員会（IWS）を脱退して商業捕鯨を再開」、こんなニュースが昨年の暮れに報道された。IWSにおいて多数を占める反捕鯨国との意見対立で妥協点が見つからず、商業捕鯨再開のためには脱退せざるを得ない、との結論だった。

昭和20年生まれの小生にとって、子供の当時、肉といえば「鯨肉」だった。牛肉や豚肉、あるいは鶏肉さえも高級品で盆と正月以外はめったに味わうことがなかった。そんな時代をなつかしく思い出しながら、飽食の現代にあって、なぜ、IWCを脱退し諸外国の批判を受けてまで鯨肉にこだわるのか、という率直な疑問にとらわれた。

2. クジラの食文化

下の図は日本国内の鯨肉と牛・豚・鶏肉・魚介類の消費量の推移を示したものである。鯨肉が1960年代のピークから急減するとともに牛・豚・鶏肉の消費が増えてきたことを示している。この背景には、農産物の自由化によって牛・豚・鶏肉が手ごろな価格で豊富に供給されるようになり、鯨肉離れが加速したという事情がある。それでも、美味しさで鯨肉が勝っていれば、これほどの急減はなかったであろう。



捕鯨に対しては賛否両論がいろいろとあるが、日本と反捕鯨国の立場の違いは明確だ。日本はクジラを魚介類と同じ水産資源としているのに対して、反捕鯨国はクジラを動物保護の対象と見なして生態系保護や環境保全を主張している。このように基本的な立場の違いが妥協点を見出すことは不可能に近い。

[日本技術士会岐阜支部 会報の情報連絡先]

〒509-0108 各務原市須衛町1-179-1 テクノプラザ5F
TEL: 0583-79-0580 FAX: 0583-85-4316 Email: gcea9901@ybb.ne.jp

水産庁のホームページは、「鯨問題に関するよくある質問と答え」と題する欄で日本政府の立場を表明している。その全文を以下に引用する。

Q1：日本はどのように絶滅にひんしたクジラをとるのか？

一言で「クジラ」と言っても、80種あまりもあり、シロナガスクジラのように絶滅の危機に瀕している種類もあれば、ミンククジラのように資源量が極めて豊富な種類もいます。日本の調査捕鯨では、ミンククジラ、ニタリクジラ、イワシクジラ、マッコウクジラ、ナガスクジラを捕獲していますが、調査の際には、現在の資源量に悪影響を与えないような捕獲頭数を科学的手法により算出し、その頭数の範囲内で捕獲を行っています。

日本は、資源が豊富なクジラの種・系群を枯渇させることなく持続的に利用することを基本方針としており、シロナガスクジラのように個体数の少ない種類については積極的に保護に取り組んでいます。

Q2：調査捕鯨は疑似商業捕鯨ではないか？

調査捕鯨では、1頭1頭のクジラから、それぞれ100項目以上の科学データが収集されています。その分析結果は、毎年国際捕鯨委員会（IWC）科学委員会に報告されており、高い評価を得ています。

また、調査が終わった後の鯨肉は市場で販売されていますが、これは国際捕鯨取締条約において、捕獲したクジラは可能な限り加工して利用しなければならないと規定されていることに基づいているものです。

調査捕鯨は、鯨類の調査のために行われているものであり、鯨肉を販売することを目的として行われているものではありません。

Q3：日本は海外援助で発展途上国の票を買っているのではないか？

そのようなことは行っていません。日本の海外援助は世界の150カ国以上を対象に行っていますが、この中には常に反捕鯨の政策をとっている国も含まれています。

鯨類資源の持続的利用を支持する国々は、各国の意志に基づきその考え方を支持しているのです。

Q4：クジラを殺さなくとも調査はできるのではないか？

クジラの資源管理には、さまざまなデータが必要となります。例えば、資源管理のために必要な年齢についての正確なデータは、現在のところ、内耳に蓄積する耳あかの固まり（耳垢栓）や歯がなければ、得ることができません。また、クジラがいつ、どこで、何をどれくらい食べるかを知るためには、胃の内容物を見るしか方法がありません。これらはいずれもクジラを捕獲しなければ得られないデータです。

もちろん、クジラを捕獲しなくても得られるデータについては、捕獲を行わずに目視調査などにより入手しています。実際、日本が中心となって実施している目視調査は世界でも

最も充実したものとなっています。

鯨類資源に関する調査においては、調査目的に応じて必要な科学データを得るために、それぞれに最適な方法に用いているのです。

Q5：どうして世界の世論に反して捕鯨を行うのか？

鯨類の持続的利用は世界の多くの国が支持する考え方であり、反捕鯨は世界の世論では決してありません。国際捕鯨委員会（IWC）においても、加盟国の半数近くが鯨類の持続的利用に賛成しており、2006年の年次会合では、持続的利用支持国が反捕鯨国を上回りました。また、そもそも国際捕鯨取締条約は鯨類の持続的利用をその目的としており、この条約に基づき、国際捕鯨委員会（IWC）が設立されています。適切な資源管理の下、豊富な資源量を有する鯨種・系群について持続的に利用することは、元来認められていることなのです。

Q6：クジラを食べなくても他に食べ物があるのではないか？

第一に、水産資源の持続的利用は、国際法上も謳われているものですが、現在は、鯨類という持続的に利用できる水産資源を利用できないという、矛盾した状況と言えます。科学的にも、法的にも正当な捕鯨が、国際的に認められている水産資源の持続的利用の原則に反して否定されてきたということが、そもそも問題なのです。

第二に、食は量さえ足りれば何を食べても変わらないというものではありません。世界各国の民族は、それぞれの生活環境、自然、そして歴史に基づく食文化を発展させ、維持してきました。クジラを獲り食べることは、そのような食習慣を有する地域の人々にとってかけがえのない文化なのです。

第三に、過剰保護による鯨類の増加が他の漁業資源に悪影響を与えている可能性があり得ることが、これまでの研究により示唆されています。特定の生物を過剰に保護することは、海洋生態系のバランスを崩し、私たちが食する他の水産資源にも影響を与えかねません。

Q7：クジラは特別な動物と思わないか？

クジラに限らず、すべての動物が特別なものです。すべての動物がかげがえのない生命を持ち、食う食われるの関係で生態系の中での役割を果たしています。もちろん、人間もこの生態系の一部です。他方、人間は様々な民族や国民が様々な生き物に特別な地位を与えています。例えば、多くの国で食料とみなされる牛も、インドでは神聖な動物です。ある民族や国民が自らの特定の動物に対する価値観を他の民族や国民に押しつける行為は許されるべきではありません。これは、クジラについても同様です。全ての生物を客観的に理解することが必要です。

ここでは、当然のことだが鯨肉が日本人にとって重要な食料資源とは言っていない。その代わりに、日本の「伝統的食文化」を守ることの価値を訴えている。

[日本技術士会岐阜支部 会報の情報連絡先]

〒509-0108 各務原市須衛町1-179-1 テクノプラザ5F
TEL：0583-79-0580 FAX：0583-85-4316 Email:gcea9901@ybb.ne.jp

3. ツグミの食文化

岐阜県、特に東濃地域では、カスミ網猟で捕獲したツグミなどの野鳥を食べる「伝統的食文化」が昔は盛んだった。その道の食通にとって野鳥の味は絶品だそう。秋、ツグミなどの渡りの季節になると食通達は、先を争って山間にカスミ網を仕掛けた。東濃育ちの義父からそんな話を聞いたことがある。また、カスミ網猟は農閑期の副業になり、中津川市には野鳥専門の料理屋が繁盛していた。

ところが、戦後まもない昭和 21 年、GHQ（連合軍総司令部）はツグミなど野鳥の捕殺とカスミ網猟を全面禁止にした。戦後の食糧難で野鳥は貴重な蛋白源であったが、GHQの命令は絶対的であった。このきっかけは、GHQの天然資源局に赴任してきた鳥類学者のオースティン博士が、カスミ網猟によって愛すべき野鳥が残酷に大量捕殺されている現場を見て驚愕したことにあった。その後も彼は日本で野鳥の保護に尽力した。

愛鳥家の鳥類学者ではなくて、植物学者や昆虫学者が赴任していたらカスミ網猟はもっと続いていただかも知れない。

その後、1990年代後半になって鳥害対策としてカスミ網猟復活の是非が議論されたが、「日本野鳥の会」などの団体が野鳥保護の立場からカスミ網猟禁止に奔走した。その結果、現在ではカスミ網の所持・販売・頒布が法律によって禁止されている。

4. おわりに

クジラとツグミ、両者の共通点は、①ある地域の「伝統的食文化」 ②一般に普及した食べ物ではなく、一部の食通の嗜好品の食べ物 ということである。

ツグミはGHQによって有無を言わず捕殺禁止にされ、更に「日本野鳥の会」などの団体が援護した。

これに対して、クジラは政府が捕鯨を推進し、国内に反捕鯨の有力団体がいない。海外から「シーシェパード」などの荒っぽい団体がクジラを助けに来るかも知れないが。

水産庁は商業捕鯨再開に備えて鯨肉の消費喚起と販路拡大など捕鯨産業育成のために来年度予算に 51 億円を計上して将来的に捕鯨産業の自立を支援する、との新聞報道があった。自立できなかつたら、いつまでも補助金頼みの「伝統的産業」になるのだろうか。あるいは、それなりの規模に縮小して自立安定を目指すのだろうか。

これを書きながら急にクジラを食べたくなった。家内に聞いたところ、たまにスーパーでクジラ肉を見かけるとのことだが、手っ取り早くクジラ料理店で 50 年ぶりのクジラ肉を味わおうと思っている。今の日本に鯨肉が普及するかどうかを、この舌で確かめたい。

「伝統的食文化」と言えば、蜂の子、イナゴ、ザザムシなどの昆虫食もあるが、こちらは生物保護とは縁遠いし、どうみても普及する食べ物ではない。

以上